

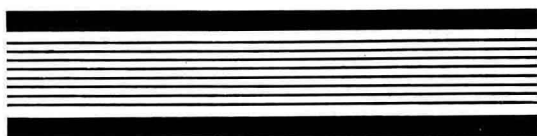
日本文学全集
別巻1

現代名作集

五重塔・たけくらべ・武蔵野・高野聖
蒲団・平凡・カインの末裔・蟹工船・他

河出書房

現代名作集



カラー版日本文学全集 別 1

1969 ©

昭和四十四年五月二十日 初版印刷
昭和四十四年五月三十日 初版発行

定価 七五〇円

編者 山本健吉

発行者 中島隆之

印刷者 草刈竜平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

現代名作集

五重塔	幸田露伴 五
たけくらべ	樋口一葉 六
武蔵野	国木田独步 七
高野聖	泉鏡花 七
野菊の墓	伊藤左千夫 八
蒲団	田山花袋 二六
平凡	二葉亭四迷 二四
銀二郎の片腕	里見弴 二一
カインの末裔	有島武郎 二〇
末枯	久保田万太郎 三
恩讐の彼方に	菊池寛 三

蔵の中
蟹工船
交尾
積雪
山月記

.....宇野浩二 二六七
.....小林多喜二 二八六
.....梶井基次郎 二八二
.....瀧井孝作 二五七
.....中島 敦 二四四

注 釈
年 譜
解 説
紅野 敏郎 二四八
保昌 正夫 二六七
山本 健吉 二六五

巻頭口絵 たけくらべ
色刷挿画 五重塔
堅山 南風
吉田 善彦

武蔵野
高野聖
野菊の墓
三谷十糸子
加藤 栄三

蒲団
平凡
深沢 紅子
有島 生馬

カインの末裔
蔵の中
蟹工船
中川 紀元
吉井 淳二

現代名作集

五 重 塔

幸 田 露 伴

其 一

木理美しき規胴、縁にはわざと赤檜を用いたる岩置作りの長火鉢に
 対して話し敵もなく唯一人、少しは淋しうに坐り居る三十前後の
 女、男のように立派な眉をいつ掃いしか刺つたる痕の青々と、見る眼
 も覚むべき雨後の山の色をとどめて翠の匂い一トしお床しく、鼻筋つ
 んと通り眼尻キリリと上り、洗い髪をぐるぐると酷く丸めて引裂紙を
 あしらいに一本簪でぐいと留めを刺した色気無の様はつくれど、憎い
 ほど烏黒にて艶ある髪の毛の一ト綜二綜後れ乱れて、浅黒いながら洗
 気の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増嫌いでも褒めずには置かれま
 じき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随
 分頼まれもせぬ詮議を蔭ではすべきに、さりととは外見を捨てて堅義を
 自慢にした身の装り方、柄の選択こそ野暮ならね高が二子の綿入れに
 綿子襟かけたを着てどこに紅くさいところもなく、引つ掛けたねんね
 こばかりは往時何なりしやら疎い綺の糸織なれど、これとて幾度か水
 を潜つて来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢が器物洗う音ばかりして家内静かに、他には
 人ある様子もなく、何心なくいたすに黒文字を舌端で囀り躍らせな
 どして居し女、ぶつりとそれを噛み切つてぶいと吹き飛ばし、火鉢の
 灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる
 長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部霞地の

大鉄瓶を正然かけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しもの
 が姉御へ御土産と呉れたらしき寄木細工の小繊麗なる煙草箱を、右の
 手に持った籠甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吸うて線香の煙るよ
 うに緩々と煙りを噴き出し、思わす知らず太息吐いて、多分は良人の手
 に入るであろうが憎いの、そりめが対うへ廻り、去年使うてやった恩
 も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、強つて此度の仕事をしようとの分
 御情はあつても、名さえ響かぬの、つそりに大切の仕事を任せらるこ
 とは檀家方の手前寄進者方の手前も難しかろうなれば、大丈夫此方に
 命けらるるに極つたこと、よしまたのつそりに命けらるればたと彼奴
 に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見
 事出来し損ずるは眼に見えたこととのよしなれど、早く良人がいよい
 よ御用命かつたと笑い顔して帰つて来られればよい、類の少ない仕事
 だけに是非して見たい受け合つて見たい、慾徳はどうでも聞わぬ、谷
 中感応寺の五重塔は川越の源太が作り居つた、ああよく出来した感心
 など言われて見たいと面白がつて、いつになく職業に気のはずみを打
 って居らるるに、もしこの仕事を他に奪られたらどのように腹を立て
 らるるか肝癪を起さるるか知れず、それも道理であつて見れば傍から
 妾の慰めようも無い訳、ああなんにせよ目出とう早く帰つて来られ
 ばよいと、口には出さねど女房気質、今朝背面から我が縫いし羽織打ち
 掛け着せて出したる男の上を氣遣うところへ、表の骨太格子手あらく
 開けて、姉御、兄貴は、なに感応寺へ、仕方が無い、それでは姉御
 に、済みませんが御頼み申します、つい昨晩酔まして、と後は云わす
 異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑いながら、仕方のない
 も無いもの、少し締まるがよい、と云い云い立って幾千かの金を渡せ
 ば、それをもつて門口に出で何やら諄々押問答せし末此方に来りて、
 拳骨で額を抑え、どうも済みませんでした、ありがとうござります
 る、と無骨な礼をしたるも可笑し。

其 二

火は別にとらぬから此方へ寄るがよい、と云いながら重げに鉄瓶を取り下して、属輩にも如才なく愛嬌を汲んで与る椀湯一杯、心に花のある待遇は口に言葉の仇繁きより懐かしきに、悪い請求をさえすらりと聴いて呉れし上、胸に蟠屈りなく淡然と平日のごとく仕做されては、清吉かえって心差かしく、どうやら魂魄の底の方がむず痒いようにに覚えられ、茶碗取る手もおずおずとして進みかぬるばかり、済みませぬという辞諍を二度ほど繰返し後、ようやく乾き切った舌を湿す間もあらず、今頃の帰りとはいふ可哀がられ過ぎたの、ホホ、遊ぶはよけれど職業の間を欠いて母親に心配さすようでは、男振が悪いではないか清吉、汝はこの頃仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済むと直に根岸の御別荘の御茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人のも遊ぶは随分好きで汝達の先に立って騒ぐは毎々なれど、職業を粗略にするは大の嫌い、今も汝の顔でも見たらば又例の青筋を立つるに定って居るを知らぬでもあるまいに、さあ少し遅くはなつたれど母親の持病が起つたとか何とか方便は幾干でもつくべし、早う根岸へ行くがよい、五三様も了つた人なれば一日をふてて怠惰ぬに免じて、見透かしても旦那の前は庇護うて呉るであらう、お朝飯がまだらしい、三や何でもよいほどに御膳を其方へこしらえよ、湯豆腐に蛤鍋と行かぬが新漬に煮豆でも構わぬわのう、二三杯かつこんで直と仕事に走りやれ走りやれ、ホホ睡くても昨夜をおもえば堪忍の成るうに精を惜むな辛防せよ、よいわ弁当も松に持たせて遣るわ、と苦くはなけれど効驗ある薬の行きとどいた意見に、汗を出して身の不始末を憚する正直者の清吉。

姉御、では御厄介になつて直に仕事に突走ります、と驚愕みにした手拭で額拭き拭き勝手の方に立つたかとおもえば、もうざらざらざらつと口の中へ打込む如く茶漬飯五六杯、早くも食うてしまつて出て来り、左様なら行つてまいります、と肩ぐるみに頭をついと一ツ下げて

煙草管を収め、臺屋の煙草入三尺帯に、さすがは気早き江戸ツ子氣質、草履つかかけ門口出ずる、途端に今まで黙って居たし女は急に呼びとめて、この二三日にのっそり奴に逢うたか、と石から飛んで火の出し如く声を進らし問いかくれば、清吉ふりむいて、逢いました逢いました、しかも昨日御殿坂で例ののっそりがひとしおののっそりと、往生した鶏のようにぐたりと首を垂れながら歩行いて居るのを見かけましたが、今度此方の棟梁の対岸に立つてののっそりの癖に及びも無い望みをかけ、大丈夫ではあるものの幾干か棟梁にも姉御にも心配をさせるその面が憎くつて面が憎くつて堪りませぬば、やいののっそりめと頭から毒を浴びせて呉れましたに、彼奴のこと故気がつかず、やいののっそりめ、のっそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴つて遣りましたればようやく吃驚して梟に似た眼で私の顔を見詰め、ああ清吉あーにーいかと寝惚声の挨拶、やい、汝は二分好い男兒になったの、紺屋の干場へ夢にでも上つたか大層高いものを立てたがって感応寺の和尚様に胡麻を指り込むという話したが、それは正気の沙汰か寝惚けてかと冷語を幕向から与つたところ、ハハハ姉御、愚鈍い奴というものは正直ではありませんか、なんと返事をするかとおもえば、我も随分骨を折つて胡麻は指つて居るが、源太親方を対岸に立てて居るのでどうも胡麻が指りづらくて困る、親方がのっそり汝やつて見ると譲つて呉れれば好いけれどもうとの馬鹿に虫の好い答え、ハハハ憶い出しても、心配そうに大真面目くさく云つたその面が可笑しくて堪りませぬ、余り可笑しいので憎気も無くなり、篋極めと云い捨てに別れましたが、それ限りか。然。そうかえ、さあ遅くなる、関わずに行くがよい。左様ならと清吉は自己が仕事におもむきける、後はひとり物思い、戸外では無心の兒童達が独平戦の遊びに声々喧しく、一人殺しじゃ二人殺しじゃ、醜態を見よ憎をとつたぞと号きちらす。おもえばこれも順々競争の世の状なり。

世に栄え富める人々は初霜月の更衣も何の苦慮なく、袖に糸織に自己が好きすきの衣着て寒さに向う貧者の心配も知らず、やれ妬聞きじや、やれ口切じや、それに間に合うよう是非とも取り急いで茶室成就よ待合の庇廂繕えよ、夜半のむら時雨も一服やりながらで無うては面白く窓撲つ音を聞き難しとの贅沢いうて、木枯凄じく鐘の音氷のようなって来る辛き冬をば愉快いものかなんぞに心得るれど、その茶室の床板削りに鈍礪ぐ手の冷えわたり、その庇廂の大和がき結いに吹きさらされて疳癰も起すことある職人風情は、どれほどの悪い業を前の世に為し置きて、同じ時候に他とは違い悩ませらるるものぞや、取り分け職人仲間の中でも世才に疎く心好き吾夫、腕は源太親方さえ去年いろいろ世話して下されし節に、立派なもののじやと賞められしほど確実なれど、寛濶の氣質故に仕事も取り脱り勝て、好い事は毎々他に奪られ年中嬉しからぬ生活かたに日を送り月を迎うる味気無さ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴った股引ばかり我が夫に穿かせおくこと、婦女の身としては他人の見る眼も羞ずかしけれど、なにもかも貧がさする不如意に是非はなく、いま縫う猪之が綿入れも洗い曝した松坂縞、丹誠一つで着させても着させ栄えなきばかりでなく見とも無いほど針目勝ち、それを先刻は頑足ない幼心といいながら、母様其衣は誰かのじや、小さいからは私の衣服か、嬉しいうと悦んでそのまま戸外へ駆け出し、珍らしゅう暖い天氣に浮かれて小竿持ち、空に飛び交う赤蜻蛉を撲いて取ろうとどここの町まで行ったやら、ああ考え込めば裁縫も厭気になって来る、せめて腕の半分も吾夫の氣心が働いて呉れたならばこうも貧乏はしまいに、技術はあっても宝の持ち腐れの俗諺の通り、いつその手腕の顯れて万人の眼に止まると云うことの目的もない、たまたま大工穴鑿り大工、のっそりという忌々しい諺名さえ負せられて同業中にも軽しめらるる齒痒さ恨めしさ、蔭でやきもきと妾が思うには似ず平氣なが憎らしいほどなりしが、今度はまたどうしたこと

か感応寺に五重塔の建つということ聞くや否や、急にむらむらとその仕事を是非する氣になって、恩のある親方様が望まざるをも関せず慫慂に、このような身代の身に引き受きようとは、些えら過ぎると連添う妾でさえ思うものを、他人は何んと噂するであろう、ましてや親方様は定めし憎いのっそりめと怒ってござろう、お吉様はなおさら義理知らずの奴めと恨んでござろう、今日は大抵何方に任すと言上人様の御定めなさる筈とて、今朝出て行かれしが未だ帰られず、どうか今度の仕事だけはあれほど吾夫は望んで居らるるとも此方は分に応ぜず、親方には義理もあり旁た親方の方に上人様の任さるればよいと思ふような氣持もするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずば、吾夫にさせて見事成就させたいような氣持もする、ええ氣の採める、どうなることか、到底良人には御任せなさるまいがもしもいよいよ吾夫のすることになったら、どの様にまあ親方様お吉様の腹立てらるるか知れぬ、ああ心配に頭腦の痛む、またこれが知れたらば女の要らぬ無益心配、それ故いつも身体の弱いと、有情くて無理な叱言を受けるであろう、もう止めましょ止めましょ、ああ痛、と薄痘痕のある着い顔を覺めながら即効紙の貼つてある左右の顚顚を、縫い物捨てて両手で庄える女の、齢は二十五六、眼鼻立ちも醜からねど美味きもの食わぬに膩氣少く肌理荒れたる態あわれにて、襦袢衣服にそそけ髪ますます悲しき風情なるが、つくづく独り歎ずる時しも、台所の鬲りの破れ障子がらりと開けて、母様これを見てくれ、と猪之が云うに吃驚して、汝はいつかからそこに居たと云いながら見れば、四分板六分板の切端を積んで現然と真似び建てたる五重塔、思わす母親涙になつて、お好み児ぞと声曇らし、いきなり猪之に抱きつきぬ。

其 四

當時に有名の番匠川越の源太が受負い作りなしたる谷中感応寺の、どこに一つ批点を打つべきところ有るう筈なく、五十疊敷格天井の、本堂、橋をあざむく長き廻廊、幾部の客殿、大和尚が居室、茶

室、学徒所化の居るべきところ、庫裡、浴室、玄関まで、或は莊嚴を
 尽し或は堅固を極め、或は清らかに或は寂びて各々その宜しきに適
 い、結構少しも申し分なし。そもそも微々たる旧基を振いて箇程の大
 寺を成せるは誰ぞ。法諱を聞けばその頃の三蔵尼も合掌禮拜すべきほ
 ど世に知られたる宇陀の朗円上人とて、早くより身延の山に瑩雪の苦
 学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那の三行
 に寂靜の慧觀を礪ぎ、四種の悉檀に濟度の法音を響かせられたる七
 十有余の老和尚、骨は俗界の葷壇を避くることによって鶴の如くに瘦せ、
 眼は人世の紛紜に厭きて半睡れるが如く、もとより壞空の理を諦して
 意欲の火炎を胸に揚げらるることもなく、涅槃の真を会して執着の彩
 色に心を染まざることも無ければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望ま
 れしにもあらざれど、徳を慕ひ風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、
 それらのものが雨露夜かン便宜も旧のままにては無くなりしまま、な
 お少し堂の広くもあれかしなど独語かれしが根となりて、道徳高き
 上人の新に規模を大きくうして寺を建てんと云いたもうぞと、このこ
 と八方に伝播れば、中には徒弟の伶俐なるが自ら奮って四方に馳せ感
 応寺建立に寄附を勧めて行くもあり、働きの顔に上人の高徳を演べ説き
 聞かし富豪を慫慂めて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだに平素より
 随喜渴仰の思を運べるもの雲霞の如きて、我一番に福田へ種子を投
 じて後の世を安楽くせんと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を分
 に応じて寄進せしにぞ、百川海に入ること瞬く間に金銭の驚かるる
 ほど集りけるが、それより世才に長けたるもの世話人となり用人と
 なり、万事万端執り行つて頓て立派に成就しけるとは、聞いてさえ小
 気味のよき話なり。

しかるに悉皆成就の曉、用人頭の為右衛門普請諸人用諸雜費一切し
 めくり、手脱る事なく決算したるになお大金の剩れるあり。これを
 ば如何になすべきと役僧の円道もろとも、髪ある頭に髪無き頭突き合
 わせて相談したれど別に殊勝なる分別も出でず、田地を買わんか畠買

わんか、田も畠も余るほど寄附のあれば今更またこの淨財をそのよう
 な事に費すにも及ばじと思案にあまして、面倒なり好に計らえと皺枯
 れたる御声にて云いたまわんは知れてあれど、恐る恐る円道或時、思
 さるる用途もやと伺いに、塔を建てよとた一言云われし限り振り
 向きもしたまわず、籠甲縁の大きな眼鏡の中より微なる眼の光りを
 放たれて、何の経やら論やらを黙々と読み続けられるが、いよいよ
 塔の建つに定つて例の源太に、積り書出せと円道が命令けしを、知つ
 てか知らずにか上人様に御目通り願ひたしと、のっそりが来しは今よ
 り二月ほど前なりし。

其 五

紺とはいえど汗に褪め風に化りて異な色になりし上、幾度か洗い濯
 がれたためそれとしも見えず、襟の記印の字さえ臙気となりし絆纏
 を着て、補綴のあたりし古股引を穿きたる男の、髪は塵埃に塗れて白
 け、面は日に焼けて品格なき風采のなおさら品格なきが、うろろの
 そのそと感応寺の大門を入りにかかるを、門番尖り声で何者ぞと怪し
 み誰何せば、吃驚してしばらく眼を見張り、ようやく腰を屈めて馬鹿
 丁寧な、とおずおず云う風態の何となく腑には落ちねど、大工とある
 に多力源太が弟子かなんぞの使いに来りしものならんと推察して、通
 れと一言押柄に許しける。

十兵衛これに力を得て、四方を見廻しながら森厳しき玄関前にさ
 しかり、御頼申すと二三度いえば、風衣の青黛頭、可愛らしき小坊
 主の、応と答えて障子引き開けしが、応接に慣れたるもの眼捷く人
 を見て、敷台までも下りず突立ちながら、用事なら庫裡の方へ廻れ、と
 情無く云い捨てて障子びつしやり、後は何方やらの樹頭に啼く鴨の声
 ばかりして音もなく響きもなし。なるほどと独言しつつ十兵衛庫裡に
 まわりてまた案内を請えば、用人為右衛門仔細らしき理屈顔して立出
 で、見なれぬ棟梁殿、何所より何の用事で見えられた、と衣服の粗末

なるにはや侮り軽しめた言葉遣い、十兵衛さらに気にもとめず、野生は大王の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかかり御願いをいたしたい事のあつてまいりました、どうぞ御取次ぎ下されまし、と首を低くして頼み入るに、為右衛門じろりと十兵衛が垢臭き頭上より白の鼻緒の風色になった草履穿き居る足先まで睨め下し、ならぬ、ならぬ、上人様は俗用に御関りはなされぬわ、願というは何か知らねと云うて見よ、次第によりては我が取り計らうて遣る、とさきも万事心得た用人めかせる才物ぶり。それを無頓着の男の質朴にも突き放して、いえ、ありがとうはござりますれど上人様に直々で無うては、申しても役に立ちませぬこと、何卒ただ御取次を願います、と此方の心が醇粋なれば先方の氣に觸る言葉とを斟酌せず推返し言へば、為右衛門腹には我を頼まぬが憎くて惱りを含み、理の解らぬ男じやの、上人様は汝ごとき職人等に耳は仮したまわぬというに、取次いでも無益なれば我が計うて得せんと、甘く遇えは附け上る言分、最早何も彼も聞いてやらぬ、帰れ帰れ、と小人の常態とて語氣たちまち粗暴くなり、膠なく言い捨てたんとするに周章で十兵衛、ではござりましょうなれど、と半分いう間なく、五月蠅い、喧しいと打消され、奥の方に入られてしもうて茫然と土間に突立ったまま掌の裏の螢に脱去られし如き思いをなしけるが、是非なく声をあげてまた案内を乞うに、口ある人の有りや無しや薄寒き大寺の岑閑と、反響のみは我が耳に墮ち来れど咳声一つ聞えず、玄関にまわりてまた頼むといへば、先刻見たる憎気な伶俐小僧の一寸顔出して、庫裡へ行けと教えたるに、と独語きて早くも障子びしやり。

また庫裡に廻りまた玄関に行き、また玄関に行き庫裡に廻り、終には遠慮を忘れて本堂にまで響く大声をあげ、頼む頼む御頼申すと叫べば、其声より大きな声を発して馬鹿めと罵りながら為右衛門ずかずかと立出で、僮僕ともこの狂漢を門外に引き出せ、騒々しきを嫌いたもう上人様に知れなば、我等が此奴のために叱らるべしとの下知、心得ましたと先刻より僕人部屋に転がり居し寺僕等立ちかかり引き出さんと

する、土間に坐り込んで出されじとする十兵衛。それ手を取れ足を持ち上げよと多勢口々に罵り騒ぐところへ、後園の花二枝三枝剪んで床の眺めにせんと、境内あちこち逍遙されし朗門上人、木蘭色の無垢を着て左の手に女郎花桔梗、右の手に朱塗の把りの袂持たせられしまゝ、図らずここに来かかたまいぬ。

其 六

なにごとに罵り騒ぐぞ、と上人が下したもう鶴の一声の御言葉に群雀の輩鳴りを歇めて、振り上げし拳を蔵すに地なく、禪僧の問答に有りや有りやと云いかけしまゝ一喝されて腰の折けたる如き風情なるもあり、捲り縮めたる袖を体裁悲げに下して狐鼠狐鼠と人の後に隠るもあり。天を仰げる鼻の孔より火煙も噴くべき驕慢の怒に意気昂ぶるし為右衛門も、少しは慚じてや首を俛れ掌を揉みながら、自己が発頭人なるに是非なく、有し次第を我田に水引き水引き申し出れば、瘦せ皺びたる顔に深く長く痕いたる法令の皺溝をひとしお深めて、にったりと徐かに笑いたまい、婦女のように軽く軟かな声小さく、それならび騒がずともよいこと、為右衛門汝がただ従順に取り次ぎえすれば仔細は無うてあろうものを、さあ十兵衛殿とやら老朽について此方へ可来、とんだ気の毒な目に遇わせました、と万人に尊敬い慕るる人はまた格別の心の行き方、未学を軽んぜず下司をも侮らず、親切に温和しく先に立つて静かに導きたもう後について、迂闊な根性にも慈悲の浸み透れば感涙とどめあえぬ十兵衛、段々と赤土のしつとりとしたところ、飛石の画題に布かれあるところ、梧桐の影深く四方竹の色ゆかしく茂れるところなど繁り繞り過ぎて、小やかなる折戸を入れれば、花もこれといはなき小庭のただものさびて、有楽形の燈籠に松の落葉の散りかかり、方星宿の手水鉢に苔の蒸せるが見る眼の座をも洗うばかりなり。

上人庭下駄脱ぎすてて上にあがり、さあ汝も此方へ、と云いさして掌に持たれし花を早速に釣花活に投げこまるるにぞ、十兵衛なかなか

怯ず臆せず、手拭で足はたくほどの事も気のつかぬ男とて為すことな
く、草履脱いでの上りと三疊台目の茶室に入りこみ、鼻突き合わす
まで上人に近づく坐りて黙々と一札する態は、礼儀に嫻わねど充分に
偽飾なき情の真実をあらわし、幾度か直にも云い出んとしてなお聞き
かぬる口をようやくに開きて、舌の動きもたどたくしく、五重の塔
の、御願に出ましたは五重の塔のためござります、と藪から棒を突
き出したように尻もったてて声の調子も不揃に、辛くも胸にあること
を額やら腋の下と汗と共に絞り出せば、上人もおもわず笑を催され、何
か知らねど老衲をば怖いものなぞと思わず、遠慮を忘れて緩りと話を
するがよい、庫裡の土間に坐り込うで動かずに居た様子では、何か深
う思い詰めて来たことであろう、さあ遠慮を捨てて急かずに、老衲を
ば朋友同様にともうて話すがよい、と飽くまで慈しき注意。十兵衛脆
くも梟と常々悪口受くる銅鈴眼に既涙を浮めて、唯、唯、唯ありがと
うござりまする、思い詰めて参上りました、その五重の塔を、こうい
う野郎でござりまする、御覧の通り、のっそり十兵衛と口惜しい諱名を
つけられて居る奴でござりまする、しかし御上人様、真実でござりま
する、工事は下手ではござりませぬ、知って居ります。私は馬鹿でご
ざります、馬鹿にされて居ります、意気地の無い奴でござります、虚
誕はなかなか申しませぬ、御上人様、大工は出来ます、大隅流は童児
の時から、後藤立川二ツの流義も合点致して居りまする、させて、五
重塔の仕事を私にさせていただきたい、それで参上しました、川越の源
太様が積りをしたとは五六日前聞きました、それから私は寐ませぬ
わ、御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりま
せぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪りたくはおもいませぬ
が、ああ賢い人は羨ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は
さる、死んでも立派に名を残さる、ああ羨ましい羨ましい、大工
となつて生きてゐる生甲斐もあるというもの、それに引代えこの
十兵衛は、鑿手斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨繩の曲
ることはあれ方が一にも後れを取るような事は必ず必ず無いと思へ

ど、年が年中長屋の羽目板の繕いやら馬小屋箱溝の敷仕事、天道様が
智慧というものを我には賜さらない故仕方が無いと諦めて諦めて、
拙い奴等が宮を作り堂を受負い、見るものの眼から見れば建てさせた
人が気の毒なほどのものを築造えたを見るたびごとに、内々自分の不
運を泣きますわ、御上人様、時々口惜しくて技倆もない癖に智慧はか
り達者な奴が憎くもなりますわ、御上人様、源太様は羨ましい、智慧
も達者なれば手腕も達者、ああ羨ましい仕事をなさるか、我はよ、源
太様はよ、情無いこの我はよと、羨ましいが、高じて女房にも口き
かず泣きながら寐ましたその夜の事、五重塔を汝作れ今直つくと怖
しい人に吩咐けられ、狼狽て飛び起きさまに道具箱へ手を突込んだは
半分夢で半分現、眼が全く覚めて見ますれば指の先を鑢鑿につっか
けて怪我をしながら道具箱につかまって、いつの間にか夜具の中から出
て居た詰まらなさ、行燈の前につくねんと坐つてああ情無い、詰ま
らないと思ひました時のその心持、御上人様、解りまするか、ええ、解
りまするか、これだけが誰にでも分つて呉れば塔も建てなくてもよ
いのです、どうせ馬鹿なの、のっそり十兵衛は死んでもよいのでござりま
する、腰拔鐙のように生きて居たくもないのですわ、其夜からという
ものは真実、真実でござりまする上人様、暗れて居る空を見ても燈光
の透かぬ室の隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬつと
突立つて私を見下して居りますわ、とうとう自分が造りたい気にな
つて、到底及ばぬとは知りながら毎日仕事を終ると直に夜を籠めて五
十分の一の雛形をつくり、昨夜でちょうど仕上げました、見に来て下
され御上人様、頼まれもせぬ仕事は出来ていたい仕事は出来ない口惜し
さ、ええ不運ほど情無いものはないと私が歎けば御上人様、なまじ出
来ずば不運も知るまいと女房めが其雛形をば揺り動かしての述懐、無
理とは聞えぬだけに余計泣きました、御上人様御慈悲に今度の五重塔
は私に建てさせて下され、拝みます、こここの通り、と両手を合せて
頭を畳に、涙は塵を浮べたり。

其 七

木彫の羅漢のように黙々と坐りて、菩提樹の実の珠数繰りながら十兵衛が埒なき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛が頭を下ぐるのを制しとどめて、了解りました、よく合点が行きました、ああ殊勝な心掛を持つて居らるゝ、立派な考えを蓄えていらるゝ、学徒どもの示にもしたいような、老納も思わず涙のこぼれました、五十分一の雛形とやらも是非見にまいりましょう、しかし汝に感服したればとて今直に五重の塔の工事を汝に任するわと、軽忽なことを老納の独断で云う訳にもならねば、これだけは明瞭とことわって置きます、いづれ頼むとも頼まぬともそれは表立って、老納からではなく感応寺から沙汰をしましょう、ともかくも幸い今日は閑暇のあれば汝が作つた雛形を見たし、案内してこれより直に汝が家へ老納を連れて行ては呉れぬか、と毫も辺幅を飾らぬ人の、義理明かに言葉渋滞なく云いたまえば、十兵衛満面に笑を含みつつ米舂ぐごとく無暗に頭を下げて、唯、唯、唯と答え居りしが、願いを御取上げ下さりましたか、ああ有難うござりまする、野生の宅へ御来臨下さりますと、ああ勿体ない、雛形は直に野生めが持つてまいります、御免下され、と云いさまきすがのつそりも喜悦に狂つて平素には似ず、大袈裟に一つぼっくりと礼をばするや否や、飛石に蹴躓きながら駈け出して我家に帰り、帰つたと言ふ女房にも云わず、いきなり離形持ち出して人を頼み、二人して息せき急ぎ感応寺へと持ち込み、上人が前にさし置きて帰りけるが、上人これを熟視したうに、初重より五重までの配、屋根庇廂の勾配、腰の高さ、椽木の割賦、九輪請花露盤宝珠の体裁までどこに可厭なところもなく、水際立つたる細工ぶり、これが彼不器用らしき男の手にて出来たるものかと疑はるるほど巧緻なれば、独り私に歎じたまいて、かほどの技術を有しながら空しく埋すもれ、名を免せず世を経るものもあることか、傍眼にさえも気の毒なるを当人の身となりては如何に口惜しきことならん、あわれかかるものに成るべきならば

功名を得させて、多年抱ける心願に負かざらしめたし、草木とともに朽ちて行く人の身はもとより因縁仮和、よしや惜しむも惜しみて甲斐なく止めて止まらねど、たとえば木匠の道は小なるにせよそれに一心の誠を委ね生命を懸けて、慾も大概是忘れ卑劣き念も起さず、ただただ鑿をもつては能く穿らんことを思い、鉋を持つては好く削らんことを思う心の尊さは金にも銀にも比え難きを、僅に残す便宜も無くて徒らに北鄙の土に没め、冥途の苞と齧し去らしめんかと思えば憫然至極なり、良馬主を得ざるの悲しみ、高士世に容れられざるの恨みも詮ずるところは異なることなし、よしよし、我國らずも十兵衛が胸に懷ける無価の宝珠の微光を認めしこそ縁なれ、此度の工事を彼に命け、せめては少しの報酬をば彼が誠実の心に得させんと思われけるが、不図思いよりたまえば川越の源太もこの工事を殊の外に望める上、彼には本堂庫裏客殿作らせし因みもあり、しかも設計予算まではや做し出してわが眼に入れしも四五日前なり、手腕は彼とて鈍きにあらず、人の信用は遙に十兵衛に超たり。一ツの工事に二人の番匠、これにもさせたし彼にもさせたし、いづれにせんと上人もさすがこれには迷われける。

其 八

明日辰の刻頃までに自身当寺へ来るべし、かねて其方工事仰せつけられたきむね願いたる五重塔の儀につき、上人直接に御話示あるべきよしなれば、衣服等失礼なきよう心得て出頭せよと、厳格に口上を演ぶるは弁舌自慢の円珍とて、唐辛子をむぎと嗜み食える祟り鼻の頭にあらわれたる滑稽納所、平日ならば南室和尚といえる諺名を呼びて戯談口きき合うべき間なれど、本堂建立中朝夕顔を見しより自然と狎れし馴染も今は薄くなりたる上、使僧らしう威儀をつくりて、人さし指中指の二本でややもすれば兜背形の頭顱の頂上を掻く癖ある手をも法衣の袖に殊勝くく隠蔽し居るに、源太も敬い謹んで承知の旨を頭下つづつ答えけるが、如才なきお吉は吾夫をかかる俗僧にまで

好く評^{ひやう}わせんとてか帰り際に、出したままにして行く茶菓子と共に幾干銭か包み込み、是非にというて取らせけるは、思^{おも}えは怪^{あや}しからぬ布施の仕様なり。円珍十兵衛が家にも詣^よりて同じ事を演^{えん}べ帰りけるが、さてその翌日となれば源太は鬚^{ひげ}剃り月代^{げいだい}して衣服をあらため、今日こそは上人の自ら我に御用仰せつけらるるなればと勢^{いき}込んで、庫裏より通り、とある一ト間に待たされて坐を正しくし扣^ひえける。

態^{たい}こそ異れ十兵衛も心は同じ張^{はり}を有^あち、導^うかるるまま打通りて、人氣の無きに寒き湧く一室の中にただ一人兀然^{ぶつぜん}として、今や上人の招びたもるか、五重の塔の工事一切汝に任すと命^{めい}令^{れい}たもるか、もしまた我には命^{めい}じたまわす源太に任すと定めたまいしを我にこたわるため招ばれしか、そうにもあらば何とせん、浮むよしなき埋もれ木の我が身の末に花咲かん頼みも永く無くなるべし、ただ願^{ねが}わくは上人の我が愚^ぐ鈍^{どん}しきを憐^{あは}れみて我に命^{めい}令^{れい}たまわんことをと、九尺二枚の唐^{から}徳^{とく}に金鳳銀鳳翔^{しょう}り舞うその箔^{はく}模様の美しきも眼に止めずして、茫々^{まうまう}と暗路^{あんろ}に物を探るごとく念想^{ねんじやう}を空に漂わすこと良久しきところへ、例の伶俐^{れいれい}気な小僧いで来りて、方丈さまの召しますほどに此方へおいでなされまし、と先に立つて案内すれば、素破や願望^{がんぼう}の叫^{こゑ}うとも叶^{かな}わざるとも定まる時ぞと魯鈍^{ろどん}の男も胸を騒^{さわ}がせ、導^うかるるまま随^{したが}いて一室の中へずつと入る、途端に此方をぎろりと見る眼鏡^{めがね}く怒^{いか}を含んで斜に睨^{にら}むは思いがけなき源太にて、座に上人の影もなし。事の意外に十兵衛も足踏みとめて突立^{つきたて}つたるまま一言もなく白眼^{びやくがん}合^あひしが、是非なく畳二ひらばかりを隔^へてしところによりやく坐り、力なげ首肯^{しゅくこん}然^{ぜん}と己^{おのれ}れが膝に氣勢^{きせき}のなきたそうなる眼を注^つぎ居るに引き替^かえ、源太郎は小^こ狗^こを蹴^け下^{くだ}るす猛鷲^{めいしゆ}の風に臨^{りん}んで千尺の巖の上に立つ風情^{ふうせい}、腹に十分の強^{つよ}みを抱^{かか}きて、背を屈^かげねば肩をも歪^{よこ}めず、すつきり端然^{たんぜん}と構^{かま}えたる風姿^{ふうさ}と云い面貌^{めいぼう}といふ水際^{みづぎ}立^たつたる男振り、万人が万人とも好かずには居られまじき天晴^{てんせい}小氣味^{せうき}のよき好漢^{こうかん}なり。

されども世俗の見解には墮^だちぬ心の明鏡^{めいけう}に照^てらして彼れ此れ共に愛し、表面の美醜^{みしう}に露泥^{ろど}まれざる上人のかえつて何れをもと昨日までは

扱^あびかねられしが、思いつかるることのありてか今日はわざわざ二人を招^{まね}び出されて一室に待たせ置かれしが、今しも静々^{しやうじやう}居間^{いま}を出られ、畳踏^{たたふみ}まるる足も軽^{かろ}く、先に立^たつたる小僧が懐^{くわい}明^{めい}くる後より、すつと入りて座につきたまえば、二人は恭^{こう}い敬^{けい}みて共に齊^{いっしょ}しく頭^{あたま}を下^{くだ}げ、しばらく上げも得^えせざりしが、ああいじらしや十兵衛が辛^{から}くも上げし面^{おもて}には、未だ世馴^{よな}れざる里の子の貴人^{きじん}の前に出^でしように羞^{はにか}み含^こみて紅潮^{こうしやう}し、額の皺^{しわ}の幾条の溝^{みぞ}には沁^{しみ}出し熱汗^{ねつあせ}を流^{なが}え、鼻の頭にも珠^{たま}を湧^わかせば腋の下には雨なるべし。膝に載^のきたる骨太の掌指^{てんしゆ}は枯^かれたる松枝^{しょうし}ごとき岩疊^{いわかさ}作^さりにありながら、一本ごとにそれさえも戦^{いくさ}々顔^{がん}えて一心にただ上人の一言^{ひとこと}を一期^{いき}の大事^{だいじ}と待つ笑止^{しょうし}さ。

源太も黙^{もく}して言葉なく耳を澄^{すめ}まして命^{めい}を待つ、どちらをどちらと判^はかぬ、二人の情^{なさけ}を汲^ひみて知る上人もまた中々に口を開^{ひら}かん便宜^{べんぎ}なく、しばしは静^{しず}まりかえられしが、源太十兵衛ともに聞^きけ、今度建^たつべき五重塔はただ一ツにて建^たてんというは汝達^{なんた}二人、二人の願^{ねが}いを双方とも聞^きき届^{いた}けては遣^はりたけれど、それはもとより叶^{かな}いがたく、一人に任^{まか}さば一人の歎^{なげ}き、誰に定^{さだ}めて命^{めい}けんという標準^{ひょうじゆん}のあるではなし、役僧^{やくそう}用人等の分別^{ぶんべつ}にも及^{およ}ばねば老僧^{らうそう}が分別^{ぶんべつ}にも及^{およ}ばぬほどに、この分別^{ぶんべつ}は汝達の相談^{さうだん}に任^{まか}す、老僧^{らうそう}は関^{かん}わぬ、汝達の相談^{さうだん}の纏^{まと}まりたる通^とり取り上げて与^よるべければ、よく家に帰^{かへ}つて相談^{さうだん}して来^こよ、老僧^{らうそう}が云^いうべきことはこれぎりじやによつてそう心得^{こころえ}得^えて帰^{かへ}るがよいぞ、さあ確^{たしか}と云^いい渡^わしたぞ、もはや帰^{かへ}つてもよい、しかし今日は老僧^{らうそう}も閑暇^{かんか}で退屈^{たいくつ}なれば茶話^{ちわだ}しの相手^{あて}になつてしばらく居^ゐてくれ、浮世^{うきよ}の噂^{うわさ}など老衲^{らうなつ}に聞^きかせて呉^{くれ}れぬか、その代り老僧^{らうそう}も古い話^{はなし}しの可笑^{おかし}しなを二ツ三ツ昨日見^み出したを話^{はなし}して聞^きかそう、と笑顔^{えんがほ}やさしく、朋友^{とも}かなんぞのよう^{よう}に二人をあしろうて、さて何事を云^いい出^でさるるやら。

其 九

小僧^{せうそう}が将^{まさ}つて来^こし茶を上^{かみ}人自ら汲^ひみたまいて侷^{くわく}めらるれば、二人とも勿^な体^{たい}ながりて恐れ入^いりながら頂戴^{ていだい}するを、そう遠慮^{えんりょ}されては言葉に

角が取れいで話が丸う行かぬわ、さあ菓子も挾んではやらぬから勝手に摘んで呉れ、と高坏推遣りて自らも天目取り上げ喉を湿したまい、面白い話というも桑門の老僧等にはそう沢山無いものながら、この頃読んだ御経の中につくづくなるほどと感心したことのある、聞いて呉れこういう話じゃ、むかし某国の長者が二人の子を引きつれて麗かな天氣の節に、香のする花の咲き軟かな草の滋つて居る広野を愉快げに遊行したところ、水は十分に夏の初め故涸れたれどなお清らかに流れて岸を洗うて居る大きな川に出逢うた、その川の中には珠のような小磯やら銀のような砂でてきて居る美しい洲のあったれば、長者は興に乗じて一尋ばかりの流を無造作に飛び越え、彼方此方を見廻せば、洲の後面の方もまた一尋ほどの流で陸と隔てられたる別世界、まるで浮世の腥羶い土地とは懸絶れた清浄の地であつたまま独り歎び喜んで踊躍したが、渉ろうとしても渉り得ない二人の兒童が羨ましがって喚び叫ぶを可憐に思い、汝達には来ることの出来ぬ清浄の地であるが、さほどに來たれば渡らして与るほどに待つて居よ、見よ見よ我が足下のこの磯は一々蓮華の形状をなし居る世に珍しき磯なり、我が眼の前のこの砂は一々五金の光を有てる比類稀なる砂なるぞと説き示せば、二人は遠眼にそれを見ていよいよ焦躁り渡ろうとするを、長者は徐に制しながら、洪水の時にても根こぎになつたらしき棕櫚の樹の一尋余りなを架渡し橋として与つたに、我が先へ汝は後にと兄弟争い闘いだ末、兄は兄だけ力強く弟を終に投げ伏せて我意の勝を得たに誇り高ぶり、急ぎその橋を渡りかけ半途にようやく到りし時、弟は起き上りさま口惜しさに力を籠めて橋を盪かせば兄はたちまち水に落ち、苦しき腕いて洲に達せしが、この時弟は既その橋を難なく渡り超えかかるを見るより兄もその橋の端を一揺り動かせば、もとより丸木の橋なる故弟も堪らず水に落ち、僅に長者の立つたところへ濡れ滴りて這い上つた、爾時長者は歎息して、汝達には何と見ゆる、今汝等が足踏みかけしよりこの洲は忽然前と異なり、磯は黒く醜くなり沙は黄ばめる普通の沙となれり、見よ見よ如何にと告げ知らするに二人は驚き、

眼を睜りて見れば全く父の言葉に少しも違わぬ沙磯、ああかかるもの取らんとて可愛き弟を惱せしか、尊き兄を溺らせしかと兄弟共に慚じ悲しみて、弟の袂を兄は絞り兄の衣裾を弟は絞りて互いに恤わり慰めけるが、かの橋をまた引き来りて洲の後面なる流れに打ちかけ、既この洲には用なければなおも彼方に遊び歩かん、汝達先ずこれを渡れと、長者の言葉に兄弟は顔を見合いて先刻には似ず、兄上先に御渡りなされ、弟よ先に渡るがよいと譲合ひしが、年順なれば兄先ず渡るその時に、転びやすき氣遣いて弟は端を揺がぬよう確と抑ゆる、その次に弟渡れば兄もまた揺がぬように抑えやり、長者は苦なく飛び越えて、三人ともに最長閑く徐に歩むその中に、兄が図らず拾ひし石を弟が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げたる砂を兄が覗けば眼も眩く五金の光を放ちて居るに、兄弟ともども歎喜び楽しみ、互いに得たる幸福を互いに深く讃歎し合う、爾時長者は懷中より真実の璧の蓮華を取り出し兄に与えて、弟にも真実の砂金を袖より出して大切にせよと与えたという、話して仕舞えば小供欺しのようじやが仏説に虚言は無い、小兒欺しでは決してない、噛みしめて見よ味のある話ではないか、どうじや汝等にも面白いが、老僧には大層面白いが、と軽く云われて深く浸む、譬喩方便も御胸の中に有たる真実から。源太十兵衛二人とも顔見合せて茫然たり。

其 十

感應寺よりの帰り道、半分は死んだようになって十兵衛、どんつく布子の袖組み合わせ、腕拱きつつ迂闊迂闊歩き、御上人様の彼様仰やうったはどちらか一方おとなしく譲れと論しの謎々とは、何ほど愚鈍な我にも知れたが、ああ譲りたく無いものじや、せつかく丹誠に丹誠凝らして、定めし冷えて寒かるうに御寝みなされと親切でして呉る女房の世話までを、黙つて居よ余計なと叱り飛ばして夜の眼も合さず、工夫に工夫を積み重ね、今度という今度は一世一代、腕一杯の物を建てたら死んでも恨は無いとまで思い込んだに、悲しや上人様の今日の

御論し、道理には違ひないそも無ければならぬことじゃが、これを譲っていつまた五重塔の建つという的のあるではなし、一生到底この十兵衛は世に出ることのならぬ身か、ああ情無い恨めしい、天道様が恨めしい、尊い上人様の御慈悲は充分了つて居て露ばかりも難有う無くは思わぬが、ああどうにもこうにもならぬことじゃ、相手は恩のある源太親方、それに恨の向けようもなし、どうしてもこうしても温順に此方の身を退くより他に思案も何もないか、ああ無いか、というて今更残念な、なまじこの様な事おもいたずらに、のっそりだけで済して居たらばこの様に残念な苦惱もすまいものを、分際忘れた我が悪かった、ああ我が悪い、我が悪い、けれども、ええ、けれども、ええ、思うまい思うまい、十兵衛がのっそりて浮世の伶俐な人等の物笑いになつてしまへばそれで済むのじゃ、連添う女房にまでも内々活用の利かぬ夫じやと啣ながら、夢のように生きて夢のように死んでしまへばそれで済むこと、あきらめて見れば情無い、つくづく世間が詰らない、あんまり世間が酷過ぎる、と思うのもやっぱり愚痴か、愚痴か知らねど情無過ぎるが、言わず語らず論された上人様のあの御言葉の真実のところを味わへば、あくまで御慈悲の深いのが五臓六腑に浸み透つて未練な愚痴の出端も無い訳、争う二人を何方にも傷つかぬよう捌きたまい、末の末まで共に好かれと兄弟の子に事寄せて高い御経を解きほぐして、囁んで含めて下さったあの御話に比べて見ればもとより我は弟の身、ひとしお他に譲らねば人間らしくも無いものになる、ああ弟とは辛いものじやと、路も見分かで屈托の眼は涙に曇りつつ、とぼとぼとして何一ツ愉快もなき我家の方に、糸で曳かる木偶のように我を忘れて行く途中、この馬鹿野郎兎狂漢め、我のせつかく洗ったものに何する、馬鹿めと突然に噛みつく如く罵られ、癪張声に胆を冷してハッと思へば瓦落離顛倒、手桶に立てかけありし張物板に、我知らず一足二足踏みかけて踏み覆したる不体哉さ。

尻餅ついて驚くところを、狐つ憑め忌々しい、と駄力ばかりは近江のお兼、顔は子供の福笑戯に眼を付け歪めた多福面の如き房州出ら

しき下婢の憤怒、拳を挙げて丁と打ち猿臂を伸ばして突き飛ばせば、十兵衛堪まらず汚塵に塗れ、はいはい、狐に誑まれました御免なされ、と云いながら悪口雑言聞き捨に痛さを忍びて逃げ走り、ようやく我家に帰りつけば、まあ御帰りが、遅いのでどういふことかと案じて居ました、まあ塵埃まぶれになってどうなされました、と払いにかかるを、構うなと言、気の無さそうな声で打消す。その顔を覗き込む女房の真実心配そうなを見て、何か知らず無性に悲しくなつてじつと湿のさしくる眼、自分で自分を叱るように、ええと囁らず声を出し、煙草を捻つて何気なくもてなすことはもてなすものの言葉も無し。平時に変わる状態を大方それと推察してさて慰むる便もなく、問うてよきやら問わぬが可きやら心にかかる今日の首尾をも、口には出して尋ね得ぬ女房は胸を痛めつつ、その一本は杉箸で辛くも用を足す火箸に挟んで添える消炭の、あわれ甲斐なき火力を頼り土瓶の茶をば温むるところへ、遊びに出たる猪之の戻りて、やあ父様帰つて来たな、父様も建てるか坊も建てたぞ、これ見て呉れ、とさも勇ましく障子を明けて褒められたさが一杯に罪無く莞爾と笑いながら、指さし示す塔の模形。母は襦袢の袖を噛み声も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に浮くばかりの円の眼を剥き出し、囁きもせでぐいと睨めしが、お出来した出来した、好く出来た、褒美を与ろう、ハッハハハと啣び笑いの声高く屋の棟にまで響かせしが、そのまま頭を天に對わし、ああ、弟とは辛いなあ。

其十一

格子開くる響爽やかなること常の如く、お吉、今帰った、と元氣よげに上り来る夫の声を聞くより、心配を輪に吹き吹き吸うて居し煙草管を邪見至極に抛り出して忙わしく立迎え、大層遅かつたではないか、と云いつつ背面へ廻つて羽織を脱がせ、立ちながら腰に手伝わせての袖置み小早く室隅の方にそのままさし置き、火鉢の傍へ直また戻つて火急鉄瓶に松虫の音を発させ、むずと大胡坐かき込み居る男の顔